

国際会議「核・原爆と表象/文学」：原爆文学の彼方へ

高橋, 亮
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程1年

<https://doi.org/10.15017/1901290>

出版情報：九大日文. 27, pp.59-62, 2016-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

国際会議「核・原爆と表象」 文学」——原爆文学の彼方へ——

TAKAHASHI
高橋 亮

二〇一五年十二月十二日、福岡市の九州大学西新プラザにて、今日における原爆文学の位置付けについて、発表と意見の交換を行う場としての国際会議が開かれた。奇しくもこの日は、山田洋二監督の映画作品『母と暮らせば』が全国上映された日でもあった。この作品は井上ひさしの戯曲である、原爆投下後の広島を舞台とした『父と暮らせば』と対を成すもので、戦後の長崎を主要なテーマの一つとしている。こうした、人間の在り方を変える核の存在を扱った作品の公開と、時期を同じくして核文学に対する討論の場を設けられたことは、奇遇でありながらも感慨深いことであると、開会の辞を務められた川口隆行氏も冒頭において述べられていた。このような印象的な期日に開催された今回の国際会議は、内容を基にセッション1から3に分割され、十二日と十三日の二部構成で発表が行われた。今回の試みにおいては、副題が明示しているように、第二次大戦末期の広島・長崎への原爆投下、及びその被害者・体験者を中軸においた日本特有の文学ジャンルとしての「原爆文学」からの脱却を主題へと据えていた。広島・長崎に限定された当事者の

原爆体験のみを対象とし、戦後の日本で原爆の脅威とその悲惨さを伝達することに先鋭化した「原爆文学」。この非常に限定的な枠組みと意味から抜け出し、文学の一カテゴリーとして新たな在り方とその可能性を模索するという名目を掲げているが故に、今回の会議では日本のみならずアメリカ、韓国、中国などの幅広い地域における、文学や映像といった多様な対象を考察するという、バラエティーに富んだ闊達な発表が数多く行われることとなった。

初日は、セッション1【移動する原爆—文学】と、シャマン・ラガボン氏による特別講演【大海に浮かぶ夢と放射能の島々】の構成となっていた。前半の【移動する原爆—文学】では、フエリス女学院大学の島村輝氏による「投下する」側の「記憶」——2015年・日本からの再検証」と、筑波大学の齋藤一氏による「核時代の英米文学者——Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America* (1946) の日本語訳 (1950) に基づいて」、神戸市外国語大学の松永京子氏による「ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』——大田洋子と「ネイティヴ・サヴァイヴアンス」の三つの研究発表が行われた。島村氏の発表では、写真家・新井卓制作の短編映像作品『49Pumpkins』を取り上げ、共に帰還兵の苦悩と後悔を描いたギュンター・アンデレス『ヒロシマわが罪と罰』と堀田善衛『審判』に触れつつ、歴史的言説としての「リアル」を凌駕する「想像力」を備えた、現代の核表象の可能性について語られていた。続く齋藤氏の発表では、アメリカの詩人・伝記作家 Hermann Hagedorn の長編

詩 *Bomb that Fell on America* の日本における翻訳と受容の形態について扱っていた。ここでは、『アメリカに落ちた爆弾』と邦訳された本作が、アメリカの MIRA (道徳復興運動) に連動した谷本清、相馬雪花を介した法政大学出版局からの出版と、雑誌『英語青年』や G H Q の対日文化政策との関係における池田義一郎による言説の、主に二つのルートで紹介された事実を紹介していた。松永氏の発表では、ジェラルド・ヴィゼナー『ヒロシマ・ブギー・アトム57』における、大江健三郎『ヒロシマ・ノート』と井伏鱒二『黒い雨』などの日本核文学に比較して、『夕風と街と人と』『半放浪』などの大田洋子作品の影響がより色濃く表されている特徴を明らかにした。ここでは、ヴィゼナーが大田の扇情的なレトリックと被爆者に対する「共感的」理解を喚起し、既存の「平和」概念を解体する試みを行う一方で、それをアメリカにおける先住民文学のデイスコースに組み込んでいるとする批評が展開された。また、この日には通常の発表の後、台湾・蘭嶼(ランショ)における放射性廃棄物貯蔵施設の反対運動に参加し、自身の属するタオ族の世界観に基づいた海洋文学の書き手でもある、シヤマン・ラガボン氏による特別講演も行われた。異なる専門領域や国家・民族などを超越した、多様な性格を有する「境界作家」としての自負に拠る、氏の「海洋文学」に対する独自の姿勢は、講演後に捧げられたタオ族伝統の「海の歌」の抑揚の効いた歌声同様、特別な感慨を抱かせるものであった。

二日目は、写真や映画等の映像作品を中心に扱ったセッショ

ン2【原爆を視る】と、冷戦下での核表象とその周辺における政治的動向をテーマとしたセッション3【冷戦文化と核】が行われた。セッション2ではまず、山口大学の野坂昭雄氏による「原爆写真というメディア」と(詩)において、原爆投下直後の記録写真に関する情報の錯綜について例示した上で、原爆というカタストロフを冷徹に描写する写真と、イマジナルな存在に抵抗する(詩)的表現の接点についての考察が行われた。

次に、日本大学の紅野謙介氏は「キノコ雲」と隔たりのある眼差し——戦後日本映画史における(原爆)の利用法」というテーマで、原爆投下後の「キノコ雲」が「仁義なき戦い」の冒頭シーン他、占領下においての日本映画ではどのように表象され、そして記号化されていったかを、それが他の映像と代用されてきた事実と絡めて詳しく論じられた。これと同じく映画作品を主要な題材とした、広島市立大学のマイケル・ゴーマン氏による「核の不安」から「核の無関心」へ——アメリカのポピュラーカルチャーにおける核のイメージの変容」では、一九四五年の広島・長崎原爆投下から、二〇一一年の東日本大震災における福島第一原発事故直前までの、映画・テレビ・ゲームなどのアメリカ発ポピュラーカルチャーにおける核戦争・核災害の表象の変容について語られ、近年リメイクされた映画作品などでは、原作に用いられていた核テクノロジというテーマが、現代社会の関心が高い環境・社会問題などに置換されている特徴を明らかにしていた。

そして、最後のセッションとなる【冷戦文化と核】において

は、初めにオバリン大学のアン・シェリフ氏が「核と自由——1960・1970年代の日米における公民権(反戦)反核運動」にて、安保闘争後のベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)の活動の中で作家・運動家小田実と評論家・哲学者鶴見俊輔の発言を基に、広島でのティーチ・インにおける人権の言説を連帯の軸にしたレトリックを分析し、冷戦中の世界的市民運動との連動の中で原爆文学の変容について考察が行われた。続く神戸市外国語大学の山本昭宏氏の「(核のない平和)と(核による平和)——冷戦期日本の平和論と安全保障論から」では、憲法九条と日米安保の接近および合意化が窺える一九六〇年代を軸に、中国の核武装化を境とした日本のメディア・知識人言説を比較し、「平和」という概念が形成され定着する仮定で、核兵器の存在がどのように語られていたのかについて考察がされていた。また、こうした冷戦下における核受容の韓国での形態と変遷について、韓国朝鮮大学校人文学研究院PDの林泰勲(イム・テフン)氏は「コリア核マフィアの始まり——雑誌『学生科学』を中心に」において詳しく論じられた。日本で日米安保に関する核兵器についての論争が盛んとなった一九六〇年代、韓国でも朴正熙政権下においてアメリカ企業との関与もあって原発建設計画が段階的に推進され、財政界・教育界・メディア界に跨る「核マフィア」が形成されていった。そして、これらを背景に米国大使館と文化院の支援で一九六五年に創刊された『学生科学』の内容へと注目し、そこに冷戦イデオロギーの抑圧的規制と核資本主義を内包した、兵器と発電の単純な二分

化による、核を繰り返し反復する典型的なフレームが表されていると結論付けていた。

全ての研究発表が終わった後、会議総括としての閉会の辞において長崎純心大学の長野秀樹氏は、普遍性に隠されるべきではない固有の意味の重要性を踏まえつつ、戦後思想としての「核」は「世界に共有されるべき問題」であると言及された。同時に、「原爆を語るのに日本語が最も優位のものではなくなった」とも論じられていたが、こうした現代における核への言説を裏付けるように、昨今の核に関する世界情勢は急速に危うい局面へと突入しようとしている。今回の国際会議から約一ヶ月後の二〇一六年一月六日、北朝鮮は「水素爆弾の実験」と主張する第四次核実験を電撃的に敢行し、日本・韓国・中国などの周辺国を始めとした、世界各国から強い非難と批判を浴びることとなった。また、同じ月の三日に起こったサウジアラビアとイランの国交断絶を機に、更に混迷の度合いを増している中東でも、サウジアラビアが友好国であり核保有国でもあるイランと連帯を強める動きを見せているなど、急激に不穏な様相を呈し始めている。第二次世界大戦の終結から半世紀以上が経過し、二つの核被爆を経験した日本が戦後からの脱却を宣言して久しい現代においても、未だに核の脅威は様々に形を変え、喫緊の問題として存在し続けている。こうした、世界規模で前例のない状況を迎えようとしている「核」の課題を俯瞰的に捕え、文学的・歴史の見地から未来への道筋を模索する今回のような国際会議の場は、今後も一層にその意義と重要性を増して

いくように思われる。

最後に、本文中にも挙げた研究発表の題目と発表者等の一覽を末尾へと付記し、今回の国際会議についての紹介を締め括ることとする。

【一日目】

〈セツシヨン1 移動する原爆—文学〉

○島村輝氏(フェリス女学院大学)「投下する」側の「記憶」——2015年・日本からの再検証」

○斎藤一氏(筑波大学)「核時代の英米文学者——Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America* (1946) の日本語訳(1950)について」

○松永京子氏(神戸市外国語大学)「ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』——大田洋子と「ネイティヴ・サヴァイヴァンズ」

〈特別講演〉

○シヤマン・ラガボン(小説家)「大海に浮かぶ夢と放射能の島々」

【二日目】

〈セツシヨン2 原爆を視る〉

○野坂昭雄(山口大学)「原爆写真というメディアと〈詩〉」

○紅野謙介(日本大学)「『キノコ雲』と隔たりのある眼差し——戦後日本映画史における〈原爆〉の利用法」

○マイケル・ゴーマン(広島市立大学)「『核の不安』から『核の無関心』へ——アメリカのポピュラーカルチャーにおける核のイメージの変容」

〈セツシヨン3 冷戦文化と核〉

○アン・シエリフ(オバリン大学)「核と自由——1960・1970年代の日米における公民権/反戦/反核運動」

○山本昭宏(神戸市外国語大学)「『核のない平和』と『核による平和』——冷戦期日本の平和論と安全保障論から」

○林泰勲(韓国朝鮮大学校人文学研究院PD)「『コリア核マフィアの始まり』——雑誌『学生科学』を中心に」

(九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程一年)